

## 糸魚川世界ジオパーク 現地再審査報告書

中田節也（東大地震研）・戸田 康（山陰海岸）・松原典孝（山陰海岸）

期間：平成 24 年 12 月 25～26 日

主な参加者（所属）

米田徹（糸魚川ジオパーク協議会会長（糸魚川市長））、久保雄（糸魚川ジオパーク市民の会会長）、北村雄一（糸魚川商工会議所総務課長）、高野斉（新潟県糸魚川地域振興局課長）、関原右一（糸魚川ジオパーク観光ガイドの会会長）、渡辺和子（糸魚川ジオパーク観光ガイドの会）、水島美恵子（糸魚川ジオパーク観光ガイドの会）、片山佐一（糸魚川着地観光の会会長）、大久保峰生（糸魚川市観光協会事務局長）、木島勉（糸魚川市教育委員会文化振興課学芸員）、伊藤一久（糸魚川ヒスイ商組合事務局（糸魚川商議所））、岩崎笑美子（糸魚川ヒスイ商組合糸魚川観光物産センター）、龍見雄記（糸魚川ヒスイ商組合会長）、市川哲（糸魚川市立糸魚川小学校教諭）、親跡久樹（糸魚川市教育委員会こども課指導主事）、斉藤孝（糸魚川市産業部商工農林水産課長）、齋藤武司（対岳荘代表取締役）、丸山明三（白馬山麓国民休養地運営協議会会長）、滝川一夫（糸魚川市交流観光課長）、渡辺成剛（糸魚川市 GP 推進室長）、竹之内耕（糸魚川市 GP 推進室副参事）、斉藤清一（糸魚川市 GP 推進室東京事務所長）、大嶋利幸（糸魚川市 GP 推進室係長）、鳥越寛子（糸魚川市 GP 推進室主事）

見学地点

美山公園・博物館ジオサイト（フォッサマグナミュージアム）、親不知ジオサイト（道の駅親不知ピアパーク、親不知コミュニティロード）、ヒスイ王国館

### 現地再審査のまとめ

#### 1) ジオサイトと保全

ヒスイの原産地（小滝川、青海川）は文化財に指定し保護されている。6～12 月は土、日、祝祭日には監視員が巡回するなど、盗掘等を防ぐ努力がなされている。海岸や河川における小さなヒスイは、河川法・海岸法の範囲内で採取されている。盗掘被害の多かった青海川産巨大ヒスイ原石の一部は保護のため現場から道の駅親不知ピアパークへ移動し、保護しながら展示している。ヒスイ販売業者については、GGN の指摘に従いジオパーク運営組織から外している。また、石灰岩については GGN の指摘に従い採石業者を運営組織から外すとともに、採石関係の敷地はジオパークのエリアから外している。

糸魚川産のヒスイについては、ヒスイの加工販売が地域の伝統文化であるとの観点から、GGN 事務局の承認を得てその維持のために販売を継続している。糸魚川ヒスイ商組合では現在新規のヒスイ採集や仕入れはしておらず、すでにあるものを加工販売しており、今後数十年はその方針である。一方、ミャンマー産等、外国産ヒスイを扱う販売業者はジオパーク運営組織から外れているものの、ヒスイ王国館や道の駅親不知ピアパークなどの目立つジオパーク関連施設でそれらが販売されており、来訪者からは糸魚川ジオパークとして

外国産ヒスイの販売を認めているように映る。糸魚川における伝統工芸であるヒスイの加工・販売を継承することもまた重要である。保護・保全とヒスイ販売についてはどう共存していくか考える必要がある。今後は、ヒスイ販売業者等と協力し、ヒスイの保護・保全に積極的に取り組んでいるという姿勢を示すとともに、ジオパークとしては外国産ヒスイについても地質資源の保護・保全に取り組んでいることを対外的に理解してもらえるような工夫が必要である。

## 2) 教育・研究活動

学校教育については糸魚川市教育委員会では、0歳から18歳まで、子供を一貫教育するという基本計画を作成し、その中でジオパーク学習をきちんと位置づけた。これにより、各学校に任せきりだったジオパーク学習について、直接関与できるようになっている。世界認定後、糸魚川市理科教育センターがミュージアム内に移転したことで、理科に関しては地学だけでなく全分野で統合的に教育活動ができるようになったことも評価できる。また、中学生の香港ジオパークへの研修制度など、他ジオパークとの交流事業を積極的に行っている。さらには、高校と連携しジオパーク学習や商品開発等を行っている。生涯学習については、公民館でのジオパークに関わるセミナー等をジオパーク全域で実施している。これらの活動により、現在では、糸魚川市民の9割がジオパークを知っているほどにジオパークが住民に浸透している。来訪者に対してはミュージアム等を拠点に各種学習活動を実施しているほか、修学旅行を積極的に誘致するなど、ジオパーク外の学校に学習の場を提供している。

研究活動については、フォッサマグナミュージアムを中心に大学や研究機関等と連携して進められている。ジオパークを利用した大学での地域活動学習にも利用されている。今後、より積極的に、ジオパークとしてそれらの研究を組織的に推進・支援していくことが望まれる。

## 3) 管理組織・運営体制

事務局スタッフを認定時の3名から14名に増やすなど、事務局体制が充実してきている。英語対応スタッフも常任し国際対応がなされている。糸魚川市ジオパーク推進室を設け、ジオパークとして意識した活動を実施するなど、糸魚川市が市の事業とも一体的にジオパーク活動を進めてきている。今後、市の方針にかかわらずジオパークの運営が持続的に行えるよう、協議会としてより独立した運営体制を考慮することも望まれる。学術的な活動についても、フォッサマグナミュージアムを中心に推進されており、学芸員が事務局スタッフも兼ねていることからその結果は十分ジオパークの運営に活かされている。新潟大や上越教育大など、大学等との連携も図られている。今後はパートナーシップについて文書を交わすなど、より強力な連携体制を構築していくことが求められる。ジオパーク内にある国立公園の自然保護事務所とは密接に連絡を取り合い、連携体制がとられている。ただし新潟県とはまだ十分な連携が取られておらず、ジオパークエリア内での県の事業がジオパークを意識して行われているものの、今後、県ともより一層連携を強化し、ジオパークとして一体的に活動していくことが望まれる。

## 4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

ジオパークガイドを組織的に養成しており、ガイドを3年の更新制にするなど質の確保もなされている。今後、リスク管理などについても、市が中心になって組織的に教育し、さ

らなる質の向上に取り組む予定である。ガイドは糸魚川ジオパーク観光ガイドの会に所属しており、現在 39 名いる。有料ガイドを行っており、観光協会にも常駐している。ガイド内容はそれぞれのガイドの得意分野もあるが、おおむね地形・地質から生物、歴史・文化まで、地域の地球科学的特性などに関連付けて解説できており、一般観光客にもジオパークについて十分理解してもらえ質を有していると思われる。現状ではまだガイドの需要が決して多くはないので、今後旅行者等と連携を図るなど、ガイドの活躍する機会を増やすことが期待される。

ジオツーリズムについては、協議会および市として積極的に取り組んでおり、旅行業関係者や教育旅行関係者への売り込みにも力を入れてきた。その結果、糸魚川に来訪する観光客や学校が増えてきている。マイコミ平ではジオパークガイドや土地の地権者と連携し、ジオの保全を意識したジオツアーが展開されている。今後このようなツアーを増やしていくことが望まれる。

ジオサイトの案内看板やエリア内の道標などについては関係各所と連携をとりながら整備が進められている。情報を得ることができる施設もジオパーク内に複数ある。GGN 審査時に難しいと指摘された看板については現在張り替え作業を進めている。

商品開発については、民間が主体となり様々なジオパーク関連商品を出している。ジオサイトをテーマにした丼ぶりやブラック焼きそばなど、グルメの開発も地域を主体として行っており、それらは現在地域の顔として根付きつつある。協議会や市としてもそれらをバックアップしている。ジオパーク関連商品にはロゴマークがついているほか、ガイドブックなどで紹介している。今後さらに商品開発を促し、バックアップする体制を強化していくことが望まれる。

## 5) 国際対応（国際貢献）

GGN 大会、APGN 大会へ参加し研究活動等について発表するとともにジオパークフェアなどにも積極的に出展している。海外のジオパークと姉妹提携を結んでおり、香港ジオパークとは展示品の交換を行っているほか中学生の研修制度を設けるなど交流を積極的に進めている。JGN の事務局を引き受け GGN 事務局との窓口としての機能を果たしている。今後、ニューズレターへの投稿や国際誌への研究成果の発表など、より積極的に世界に向けた情報発信をしていくことが望まれる。

## 6) 防災・安全

防災教育は、市と市民とが連携して進めている。3.11 東日本大震災後、市内各所に海拔表示を設置した。根知小学校では、2011 年の防災教育チャレンジプランに参加し、防災教育特別賞を受賞するなど、学校においても防災教育が進められている。避難訓練は地質災害を想定したのも実施している。ジオパーク内には地すべり地など、地質災害に関連したサイトも複数あり、それらは観光客に向けても積極的に見せるようにしている。

安全管理については、特にガイドへの教育という形でリスクマネジメント等の学習を進めていく予定である。今後の展開に期待する。

以上